

特集：ラテンアメリカ環太平洋経済と TPP

## TPP：チリにとっての意義

戸村 貴徳

### はじめに

チリは自由貿易先進国と言われている。それは、1990 年半ば以降、各国と FTA 等の自由貿易協定を積極的に締結し、FTA 締結国が既に 50 カ国を超えていること（日本との包括的経済連携協定（日・チリ EPA）は 2007 年 9 月に発効）、また、それに伴い、関税率の引き下げが進展し、現在チリにおける平均関税率が 1%を下回ることからもうかがうことができる（図 1）。また、チリは、TPP の原型ともいえる P4（チリ、ブルネイ、ニュージーランド、シンガポールで構成）のメンバー国でもあり、これまでも積極的に貿易自由化を推し進めてきた。チリにとって、貿易自由化に向けた原動力は何なのか、また、TPP への参加の意義・メリットは何か。こうした点について、経済的・地政学的な側面、また、チリ人の気質なども考慮に入れつつ分析してみたい。

### 1. チリ人の気質

チリ人は一般的にまじめでルールを守る傾向にある。また、チリは治安が比較的良く、汚職も少ないと言われている。理由は諸説あるが、特にチリ南部などは、ドイツからの移民が多く、そうした移民との関連性があるのではないかとといった説も聞かれる他、チリは南米大陸に位置するといっても、北はアタカマ砂漠、東はアンデス山脈、西と南は海に囲まれ、実質的には島国と似たような地形を持つことから、日本同様、内気でまじめな島国気質を有するからだとの説も聞かれる。また、他のラテンアメリカ諸国に

比べ、自然環境が厳しく、北部は乾燥地帯、南部は一年中を通して寒い地域が多く、また、サンティアゴ周辺は、過ごしやすい気候ではあるものの、雨が降るのは一年の中でも限られた季節であり、農業生産には灌漑などの施設が不可欠となる。それなりに勤勉でなければ生きていけないといった自然条件もチリ人氣質に影響を与えているのかもしれない。

こうしたチリ人の気質もあってか、法律などのルールを作るのは得意であり、決められたルールや原則を守っていくというチリの特徴は、自由貿易政策を推進する上でも顕著である。

### 2. 自由貿易推進の原動力

ルールや原則はしっかりと守るという国民性があっても、自由貿易そのものがチリにとってメリットのあるものでなければ、自由貿易をここまで推し進めることはできなかったであろう。では、チリを自由貿易先進国へと導いた原動力は何だったのか考えてみたい。

その一つとして、チリ国内の市場規模が自由貿易を推進する上で重要な要素となったと思われる。チリの人口は 1,700 万人程度であり、チリの企業は、自国内の市場のみをターゲットとしていたのでは、スケールメリットを得ることはできず、自ずとチリ以外の南米、北米、アジア、欧州といった大規模な市場に進出することが求められたと考えるのが自然である。

他方、海外企業にとって、チリは小さな市場であり、自動車や鉱山機器、機械製品など付加価値の高い一部製品を除いて、輸出先としてあ

まり魅力的な市場として捉える要因が比較的少なかったことも考えられる。

こうしたチリの市場規模に起因するいくつかの点が、チリが貿易自由化を推進する上で有利に働いたと見ることができる。

図1 チリの貿易協定の現状（2012 年 4 月現在）

#### 1. 自由貿易協定（F T A）

相手国・地域	締 結	発 効
カナダ	1996年12月	1997年7月
メキシコ	1998年4月	1999年8月
中米5ヶ国		
ニカラグア	2011年2月	
グアテマラ	2007年12月	2010年3月
ホンジュラス	2005年11月	2008年7月
コスタ・リカ	1999年10月	2002年2月
エルサルバドル	2000年11月	2002年6月
EU（27カ国）：EPA	2002年11月	2003年2月
韓国	2003年2月	2004年4月
EFTA アイスランド リヒテンシュティン ノルウェー スイス	2003年6月	2004年1月
米国	2003年6月	2004年1月
P4 ニュージーランド シンガポール ブルネイ	2005年7月	2006年11月
中国	2005年11月	2006年11月
日本：EPA	2007年3月	2007年9月
パナマ	2006年6月	2008年3月
ペルー	2006年8月	2009年3月
オーストラリア	2008年7月	2009年3月
コロンビア	2006年11月	2009年5月
トルコ	2009年7月	2011年3月
マレーシア	2010年11月	2012年4月
ベトナム	2011年11月	

#### 2. 経済補完協定（A C E）

相手国・地域	締 結	発 効
エクアドル	2008年3月	2010年1月
ボリビア	1993年4月	1993年7月
ベネズエラ	1993年4月	1993年7月
メルコスール （アルゼンチン、ブラジル、 パラグアイ、ウルグアイ）	1996年6月	1996年10月

出所：チリ外務省経済関係総局（DIRECON）資料を基に作成

### 3. 自由貿易の影響

チリが積極的に推し進めた自由貿易政策はチリ国内の産業にどのような影響を与えたのか。養豚業を例にとってみると、チリの自由貿易協定締結が本格化する 2000 年以降、今日までの間に豚肉の生産量は倍増している（図2）。現在、チリの養豚業の多くは大規模化されており、国際競争力は比較的高いと言われている。また、前述のようにチリ国内市場が限定される中、マーケティングの対象として海外市場を強く意識しており、輸出先の嗜好をきちんと把握し、製造工程の改善を日々行い、付加価値が高く、最終製品に近い商品の製造を目指している。製造工程においては、問題があった際には速やかな対応が取れるよう、トレーサビリティなどの品質管理もきちんと行われており、養豚場から製造工程、海外の消費地に至るまで円滑な物流システムが構築されている。他の農業分野についても、果物農家などは海外市場を強く意識しており、形の良いもの、品質の良い製品の多くが海外に輸出されている。

チリの農林水産業は国際競争力が高いと言われているが、その理由として、他の先進諸国と比べ人件費が比較的安いこと、乾燥した地域が多く、伝染病、病虫害などの被害が比較的小さいこと、また、国土の東西の幅が約 200 km と狭い一方、南北に細長い国で、かつ、平地もわりあい多いことから、港湾へのアクセスが容易であり、生産拠点から港湾への運搬コストが比較的安くすむことなどが挙げられる。また、南半球における地中海性気候を最大限有効に活用し、季節が反対な北半球市場をターゲットとすることができたこともチリに有利に働いたと考えられる。

### 4. TPP参加の経済的な意義

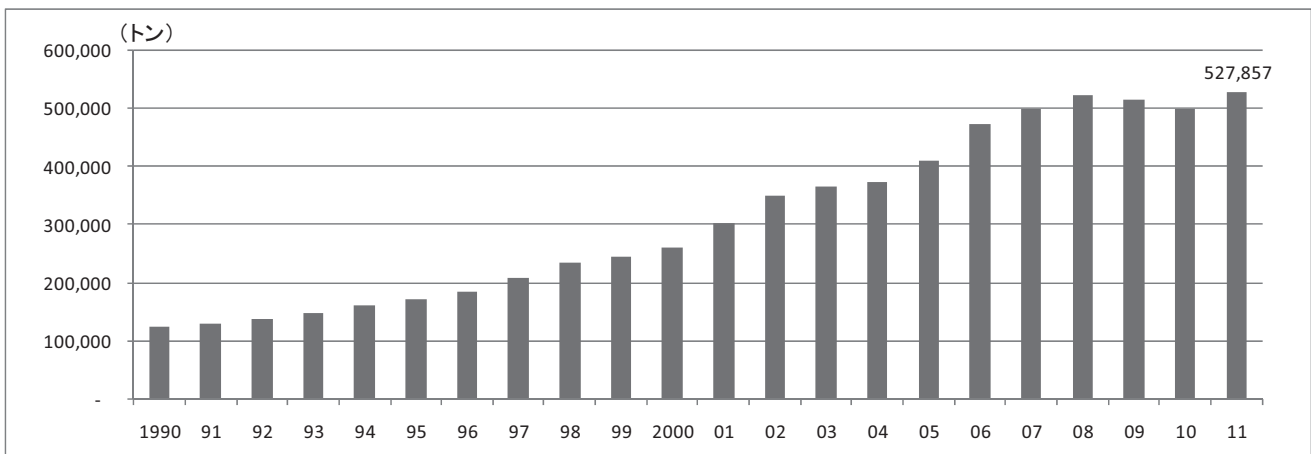
次に、チリにとっての TPP 参加の経済的な意義について考えてみたい。上述のように国内の

市場規模が比較的小さく、かつ、輸出依存度が高い（2010 年の輸出依存度：GDP 比 37%）チリにとって、政府が目標として掲げている今後 10 年間で 6% の経済成長率を維持するためには、引き続き、自由貿易を推進し、国際ネットワークを拡大し、交流関係を深化させていく必要がある。国際ネットワークの拡大にあたっては、WTO における交渉を通じた関税引下げが実施されることが最善であるが、WTO ドーハ・ラウンド交渉は停滞しており、他国同様、チリ政府も二国間及び多国間での交渉に力を入れている。

こうした情勢を踏まえ、チリ政府は TPP を重

視している。その方針は、ピネラ大統領が「ドーハ・ラウンドが遅々として進まない中、実質的には TPP が最も重要な自由貿易協定となる」と発言していることや、また、コントレーラス外務省国際経済関係総局二国間経済局長（TPP 首席交渉官）が「TPP は米国を含む大きな枠組みであり、かつ、これまでの FTA に含まれていなかった労働、貿易障害、中小企業等の新たな分野を多く含む 21 世紀型の自由貿易協定であるため、WTO 交渉に替わる新たな世界貿易体制になりうる」と述べていることからもうかがうことができる。

図 2 チリにおける豚肉生産量の推移



出所：国立統計院（INE）

## 5. TPP参加の具体的なメリット

チリにとって TPP 参加のメリットは何か。TPP は市場規模が大きく、貿易について言えば、チリから TPP 参加国への輸出が占める割合は 21%、チリへの輸入に関しては 14% が TPP 参加国からの輸入となっている。直接投資に関しても、TPP 参加国はチリにとって重要な相手となっており、これらの国と共通の協定を結ぶことは経済的な意味において非常に有益である。

また、TPP 参加による具体的なメリットの一つとして、これはチリのみならず TPP に参加す

る各国に共通することであるが、二国間 FTA は相手国によって細かい手続きや条件の差異が存在するため、原産地規則の観点から利用者は各協定の条項を確認する必要があり非常に煩雑になるが、TPP という 1 つの枠組みが成立すれば、共通の協定を確認するだけで良くなるため、利用者にとってのメリットは大きい。また、チリは、TPP を活用した中小企業の育成・発展についても期待しているように見受けられる。

## 6. TPP参加の地政学的・外交的な意義

チリは、自由貿易協定を幅広く結ぶことにより、チリを南米市場への入口とし、経済、通商関係を促進させることを目指している。そうした意味でも、南米の中でも地政学的にアジアに近いということから、南米と対アジアとの貿易関係、さらにはそれを発展させ、外交関係において、より有利な立場に立とうという意図があると思われる。

また、TPPは米国も参加した自由経済の国が関係を深める枠組みであり、また、東アジアと南米を結ぶ重要な機能を果たすものである。2010年におけるチリの輸出先はアジアが49%を占め、近年、対アジア貿易が大幅に伸びていることもあり、チリ政府はアジアとの関係強化を進めている。しかし、経済成長著しいASEAN地域における市場アクセスが脆弱であり、TPPにより、対アジア貿易がさらに活発化することが期待されている。こうしたアジア重視の姿勢は、2012年3月、ピネラ大統領が、ベトナム、韓国、日本のアジア各国を歴訪したことからもうかがうことができ、アジア歴訪中、ピネラ大統領は、TPPに関し、「世界で最も重要であり、アジアと米州という太平洋兩岸を統合する協定である」と発言している。

## おわりに

以上のように、チリは積極的な市場開放政策を実施しており、こうした政策は、与党・野党を問わず、超党派で共有された国家戦略として位置づけられていることから、今後とも継続される可能性が高いと思われる。

こうした市場開放政策の理念に基づき、TPPへの新たな参加についても、チリは、すべての太平洋諸国に対してオープンな立場である。日本のTPP参加についても、3月29日に実施された日チリ首脳会談において、ピネラ大統領が支持を表明するとともに、同日実施された日チリ外相会談においても、日本のTPP参加に関し、チリはあらゆる支援を提供する旨発言している。

(とむら たかのり

在チリ日本国大使館一等書記官)

(注:本稿は、個人の見解に基づくものであり、在チリ日本国大使館、日本政府の立場を述べたものではありません。)

〔ラテンアメリカ図書案内〕

## 『インカの食卓』

高野 潤 平凡社 2011年9月 235頁 1,800円+税

アンデス・アマゾンの写真を撮り続けてきた写真家の、その地で生活する人々の食生活、食材、多岐な料理方法などを語る食文化紀行記。アンデス高地の凍結乾燥ジャガイモや、高度が変わる毎に異なる芋や穀類、豆類、香辛料等の多彩な食材は、インカの時代から交易品も使った食生活が多彩だったことを物語る。

アンデス原産ジャガイモ古典種を尋ね、様々な唐辛子を駆使した現地料理の数々が多くの写真とともに紹介されていて、単なるアンデス紀行だけではない興味深い一冊。

〔桜井 敏浩〕